

豊能町の石の文化財について

豊能町に産出する石材は、おもに石英閃緑岩と呼ばれる石で、その質が硬いために彫刻はしにくいですが、風化剥落しにくいいため永くその姿を留めたものと思われる。特に当時は大きな石切り場はなく、露岩や転石などから採石されていたようで、材石の多い切畑、木代などでは、磨崖面や板状岩に石仏を刻むものが多い。

石造品の種目については、内容が各種におよび、特に磨崖石仏が多いのが特色といえよう。それは名号板碑や十三仏の造立が盛んであった室町末期に多く、阿弥陀仏を主仏として、その下部に全結衆造立者を地蔵の姿として彫り込んで後世の安楽往生を祈った、いわゆる逆修仏の形式の石仏群像が各地に見られることである。当地の石仏では阿弥陀仏、地藏がそのほとんどを占めていて、当時の民間信仰の実態や来世の安穩を求めた庶民の願いが感じられる。

石塔では宝篋印塔に注目すべきものが見られ、切畑大円の釈迦堂及び川尻法輪寺境内の二基、牧の梅相院などに中世の完全な形のものがあり、他にも欠損部があるが、川尻法輪姫の塔、余野遊仙寺の寄せ墓等に南北朝期のものが見られる。それらの様式には、近江、山城方面に多い要素を含み、その上に当北摂地方に多く見られる笠の隅飾の過巻紋や法輪姫の塔の基礎に見られるような独特の格狭間など、南北朝時代を前後する当地の文化の様態を垣間見ることができる。

吉川高代寺には南北朝期以降の五輪塔が数多くあり、その中でも文和三年造立の五輪塔は町内最古のものである。高代寺は「高野山に代わる寺」として栄えた寺であり、この地に江戸時代の石塔や立派な宝篋印塔がたくさんあり、その近くにある墓塔の群立する「大墓」は今後の調査が期待される。

川尻から吉川にかけて南北朝、桃山、江戸初期などに注目すべきものが見られるのは、当時このあたりにあった鉢山の繁栄につながるものがあったと思われる。

また、南北朝期、当地は足利方で北朝年号を使っているが、川尻打越の「阿弥陀三尊」には南朝年号「正平」が見られるのは珍しい。当地方は、猪名川の源流にあつて谷浅いため古来干ばつに悩まされ、雨乞いが盛んであった。山の名は「龍王山」など、信仰にちなんだものが多いのもそのためである。今も行者講や大峰登拝が行われ、妙見山も、その元は修験道につながる山であった。

また、切畑と木代に大型の石風呂があり、この付近の地名に湯谷、湯山、垂水等の名もあり、切畑大円には延喜式内の走落神社（ハシル）は水の流れを表す形容、走湯天王社という名の神社があつて、温泉または薬効のある水が湧出して、修験者の「みそぎ」か、庶民が療養に使ったものと思われる。

江戸末期から道標、燈籠、鳥居などが各所に見られるのは、妙見信仰が隆盛になり、その信徒によって造建されたものが多い。当地は古くはすべて天台、真言の密教寺院であった。鎌倉時代以降浄土宗、浄土真宗、禅宗、日蓮宗が入って現在各宗が一、二ヶ寺ずつ仲良く存立している。

また、江戸時代の相撲の関取の碑が各方面に見られるのも、娯楽の少なかった当時の人々の相撲に対する熱意のほどがうかがわれる。残念なことには、以前当地より他に搬出された石造文化財があること、また最近では、道標や小さな石仏が盗まれることもあり、郷土の先人の残された大切な文化財を、心なき人達に荒らされることは誠に残念なことである。ことに石仏や石塔は過去や現在の人々の信仰の対象であるということが、これに接する人々の大切なマナーである。